社会福祉法人　愛　神戸真生塾
題字　斉藤敬好

第２０号
２０１１年　１１月１日

○発行
650-0004
神戸市中央区中山手通
７丁目25-38
神戸真生塾広報誌編集係
TEL (078) 341-5897
FAX (078) 341-8239
E-mail: kouhou@kbshinsei-j.org
○振替口座
郵便振替01100-8-18680

子どもは変わる

社会福祉法人 神戸真生塾 理事
社団法人 家庭養護促進協会 事務局長
橋本 明

ある虐待の事件から

昭和四十七年、中部地方の小さな町で六歳女児と五歳男児の姉弟が実父により、犬小屋同然のトタン屋根で一年半にわたり監禁される事件がありました。救出後、特別なチームが組まれ、約二〇年に及ぶ発達支援が行われました。重大なネグレクト（育児放棄）から救出された子どものその後の記録は世界中で六例しかないそうです。救出時は二人とも身長八〇センチ、体重八キロほどでした。言葉は一言もしゃべらず、歩行もできず、這うのがやっとで、どうみても一歳半程度で、発達の遅れは恐ろしいほどでした。

左官だった三七歳の父親は酒浸りで、三九歳の実母がミシンの内職をしていました。子ども七人が次々に生まれ、母親は子育てを投げ出してしまいました。姉弟は排泄のしつけさえできておらず、「畳を汚す」と怒った父親はトタンで囲った屋根のない小屋を建ててむしろを一枚敷き、毛布一枚を与えて閉じ込めました。食事は小皿に盛られ、一日一～二回でした。当初は下の乳児も一緒でしたが肺炎で亡くなりました。「変な音がする」という近所の住民が町役場へ通報して救出された時、二人は丸裸で骨と皮だけになり、仮死状態で芋虫のように転がっていたといいます。

二人は児童相談所が介入して、救出後すぐに乳児院に入所し、二人の社会復帰のための、心理学者を中心とした補償教育チームが作られました。

回復の鍵は愛着形成

乳児院では、ベテランの保育士二人が姉弟それぞれを担当することになりました。二人は栄養条件が改善され、身長や体重はみるみる増えてきました。姉と弟のうち、姉は保育士にすぐなつき、愛着の成立と同時に言語や社会性など、さまざまな面が順調に発達していきましたが、一方、弟の方は保育士になじめず、対人関係の遅れが目立ちました。しかし、保育士を替えると弟は新しい保育士になつき、猛スピードで追いついていったのです。姉弟は二年遅れて小学校に入学しました。

二人が小学校に入ってからは、施設以外の生活を体験させる目的で、研究チームのメンバーの家に夏休みの一週間ほど滞在させて生活体験の機会を与えたりしています。また、母親はこの事件の後、夫と離婚し、他の子どもたちと母子寮（現在の母子生活支援施設）で暮らしていたので、お盆とお正月にはそれぞれ一週間程度帰省させて母親やきょうだいたちとの交流の機会を作り、家族の心の絆を作り直すようにしていました。

姉は現在三児の母、弟はサラリーマンで一児の父になっています。

この研究チームの一人であるお茶の水女子大学の内田伸子教授は、特定の人との愛着関係に注目し、弟の担当の保育士が代わってからの弟の目覚ましい回復ぶりはまさに「自然の実験」そのものだった、と記述しています。「愛着形成が回復の鍵を握っているのではないか」という推測は、的中したのです。

この長年にわたる発達支援プログラムから明らかになったこととして内田教授は次の三点を指摘しています。

① 養育者と子どもの間の愛着は、後からでも作り直せること

② 養育者との愛着関係の成立により遅滞から再生・回復できること

③ 自生的な成長への生体のプログラムの鍵は、養育者との愛着の絆の成立であること

この重度のネグレクトから回復した姉弟の事例は「子どもは変わる」ということを教えてくれるとともに、人間が育つ最も基本となる愛着形成の重要さをあらためて示してくれています。

（「虐待をこえて生きる～負の連鎖を断ち切る力～」内田伸子・見上まり子著　新曜社刊、を参照いたしました）

《乳児院 真生乳児院》

ハチ高原民宿にお泊り保育

ひまわりクラス担当保育　森本 智美

八月、日頃家庭に外泊が出来ない児を対象に一体一の個別保育を目的として、二組ずつの三グループに分かれて一泊二日のお泊り保育を実施しました。私は、二歳八カ月のY君と二歳一一カ月のK君とその担当者と一緒に、JRとバスを乗り継ぎ、ハチ高原に向かいました。素敵な景色を見ながら、途中眠りにつき、二時間の旅へ・・・。

到着すると周りは、緑の大自然がいっぱい広がり、おいしい空気をを吸いながら、セミのお出迎え。休む暇もなく、子どもたちは大はしゃぎで川遊びへ行き、自然と触れ合い、伸び伸びと過ごしました。河の迫力に少し圧倒されながらも、水に触れて遊びました。夜は、花火をしたり、ホタルを見たりと神戸では見られない貴重な体験が出来、子どもたちは見とれていました。あっという間に楽しい時間は過ぎ、子どもたちは布団に入ると夢の中へ。

二日目の朝の起床も早く「おはよう」と活き活きした笑顔で挨拶。都会ではなかなか触れ合うことが出来ない体験をたくさんしました。山の斜面を登っていく途中にも鮮やかな花や虫が迎えてくれました。イモ畑に到着すると、子どもたちはどろんこになりながら、スコップでイモを一生懸命掘り続けました。掘っていくとミミズの顔が出てきて、子どもたちはびっくり。「ミミズ怖い～」と言いながらも立派なイモを掘りおこし、大喜び。

田んぼや野菜畑をぬけて原っぱに行き、バッタやトンボなどを「怖い！」と言いながらも次第に慣れて、虫取りに一生懸命になっていました。

昼食では、そうめん流しを初体験。水に流れているそうめんを挟むのが楽しく、食べることよりもお箸でうまく挟むのに夢中になっていました。

帰り道では、「帰りたくない」と駄々をこねて、さとすのに手こずりました。いろいろな体験が出来，一泊二日のお泊り保育で、子どもたちは大きく逞しく成長したように感じられました。

おめでとうございます！

神戸市市長表彰

この度はこの様な表彰を頂き感謝申し上げます。今振り返ってみると、子ども達や周りの方々に支えられて来た日々だったと思います。これからも子どもの気持ちに寄り添った処遇の実践を皆で努めて行きたいし、子どもと共に成長したいと思っています。これからも宜しくお願い致します。

濱田 栄二

社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会 理事長感謝状

これまでたくさんの方々に支えていただいて今を迎えることができたことに感謝いたします。これからも真生塾の子どもたちが無事に巣立っていけるように見守りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします

清水 美香

真生乳児院の子どもの笑顔に支えられて十年が過ぎました。これからも子ども達の成長を見守ると共に私自信も更に成長していきたいと思います。

藤原麻衣子

職員や子ども達に支えられ、あっという間に十年が経ちました。感謝の気持ちでいっぱいです

これからも家庭に近い環境を心がけ、一人一人としっかり向き合い、保育士として更に成長していきたいです。

安 優美子

皆様に支えていただき仕事を続ける事ができました。食べることの楽しさ、味覚を形成する乳児期の大切な時期に携わることができうれしく思います。楽しい雰囲気で食事ができるように旬の食材を取り入れた献立を提供していきたいです。

前中 珠江

神戸市感謝状

五年前、初めて担当させて頂いた赤ちゃんが今では元気に幼稚園に通っています。あっという間の五年でしたが、一人ひとりの子どもの歩みを振り返ると、時間の重みを感じます。

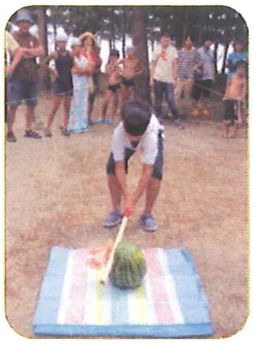
時岡 三恵

これまでに様々なケースの子ども達と出会ってきました。子ども達から、教わること考えさせられることも多く、また子ども達の日々の成長には、今もなお感動させられっ放しです。これからも子ども達の幸せを願い現状に満足せず頑張りたいと思います。

山本紗恵子

《児童養護施設 神戸真生塾》

琵琶湖キャンプ



今年も神戸真生塾恒例の夏キャンプに七月二八日から三十日の日程で琵琶湖に行って来ました。このキャンプは基本的には「琵琶湖で泳ぐ」これに尽きます。天候にも恵まれ、日なたは目もくらむ暑さでしたが、キャンプ場湖畔は松林で覆われており、大変過ごしやすい気候でした。

キャンプ場に到着すると子どもたちはキャンプ場の勝手を知り尽くしていることもあり、泳ぎたくてそわそわしていましたがそこは我慢です。各々キャビンに荷物や布団を運び込み、これから三日間過ごすキャビンを整理しなければなりません。そわそわしながらも準備を終えた後は、琵琶湖に飛び込んで行きました。

夕食のバーベキューでは、中高生の男子が大活躍です。火を熾すのに梃子摺りながらも着々と準備を進め、皆の分のお肉を焼き終えるまで、自身のことは後回しで一生懸命頑張る姿に逞しさを感じました。食後は浜辺で花火を楽しみ、その後はお決まりの肝試しです。「参加する・参加しない」は、小さな子ども達にとっては大変な葛藤があるようで、道中どれだけ怖がって泣き叫んでも、終わった後の自身に満ちた顔は素敵でした。

その他のプログラムでは、子ども会係が中心となりミニ運動会を企画してくれていました。幼児から小中高生まで協力しなければ進んでいけない競技となっており、助け合いながら大盛り上がりとなりました。この日の為に事前に何度も話し合いを重ねてくれていた成果ではないでしょうか。

またキャンプに付き物のキャンプファイアーも満点の星空の中、行うことができました。職員が趣向を凝らした出し物で、子どもも職員も一つになり楽しめましたし、職員の意外なキャラクターに子ども達も驚いていました。そして三日目には、真っ黒に日焼けをした勇ましい姿になっており、大変楽しい夏の良い思い出になったことと思います。

日常生活を離れ過ごすキャンプは、参加する皆が協力しなければ過ごすことが難しくなるということを子ども達は体感してくれたのではないでしょうか。

これは何よりも琵琶湖キャンプにて中高生が職員に頼まれても自発的に行動してくれる様子や、年少児に優しく接する姿にも表れていると思いますし、まあ代々この琵琶湖キャンプで培ってきたものだと思っています。

年長児に世話をしてもらっていた小さなこども達が中高生へと成長し、今度は世話を焼く側になった姿を目の当たりにし、子ども達の成長に目を細めています。この琵琶湖キャンプは既に三〇年以上も前から続いていると聞いています。また来年の夏もこの琵琶湖にキャンプをしに行くと思いますし、子ども達も既に楽しみにしているようです。来年もまた子ども達の成長の証をこの琵琶湖で刻んでくれるものと期待していますし、また私達職員にとっても来年まで待ち遠しい楽しみの一つになっています。

（濱田　理恵）

子ども会クリーン作戦

「子ども会」の立案で、去る六月十八日、神戸真生塾の施設内とその地域周辺のクリーン作戦（清掃活動）を行いました。

「子ども会」は幼児から高校生の代表有志の子どもたち男女計十名と職員三名とで結成されています。この「子ども会」のメンバーで話し合いの場を設け、クリーン作戦をはじめ様々なことを子ども達と一緒に企画しています。

今回のクリーン作戦は、子ども達と職員を五つの班分けし、各班ごとに清掃活動を分担して作業を行いました。

清掃が始まり、私達こども会係の職員が清掃の様子を見に行くと、満足気に「こんなに沢山拾えた！」と話す子どもがいました。未就園児もいましたが、懸命に草取りをしたりゴミ拾いをしている学童児の姿に負けまいと頑張っている姿を見て、とても感心しました。

クリーン作戦を終えてから、庭で皆で昼食のホットドッグとアイスクリームを食べました。子ども達が掃除を終え、汗を流し、笑顔で昼食を食べる姿は、頑張って綺麗に掃除をしたからこその子ども達の気持ち良さそうな表情をだったのではないかと感じました。私達職員が感じた通り、子ども達の中からも「疲れたけど綺麗になり、気持ち良かった」という感想を聞くこともでき嬉しかったです。

今後もこのように職員と子ども達が一緒になって何か一つのことを行える企画を「子ども会」のメンバーで話し合い、企画して実行していきたいと思います。

（寺岡　真帆）

《児童養護施設 神戸真生塾》

雨の納涼大会

今年八月二十日（土）恒例の納涼大会を開催することができました。納涼大会当日には雨が降ったり止んだりと微妙な天気が続き、ぎりぎりまで外で開催するのか室内で開催するのか判断に迷っていましたが、子どもたちも積極的に準備を手伝ってくれていたので天気がなんとか持ちこたえることを信じ予定通り外で開催しました。小雨が降る時もありましたが多くの方々に参加していただき、子どもたちの笑い声もあふれていました。

ステージでは乳児院の子どもたちが可愛らしく「アンパンマン音頭」「ポップンポップコーン」を披露してくれました。また、幼児の子どもたちは少し照れながらも笑顔で「マルマルモリモリ」を披露してくれました。

女子フロア・男子フロアの子どもたちによる歌は、素晴らしい歌唱力で会場を沸かせてくれました。次のうたっ子クラブでは、日頃の成果を発揮してくれ大きな声で歌っている子どもたちの姿がとても印象に残っています。「ジンガーバンド」では大人も子どもたちも協力しあったブラスバンドを聴くことができました。ステージのフィナーレをかざって下さった「神戸ちるど連」の皆さまは、生憎の天候の中、迫力のある阿波踊りを披露していただきとても感謝しています。模擬店は、カキ氷・たこ焼き・フランクフルト・がらくた市など出店し、大盛況で完売する店もありました。

私自身初めて納涼大会に参加させていただいたのですが、普段の生活ではなかなか関わることの出来ない方々とも交流を持て、とても充実した一日を過ごすことが出来ました。なにより子どもたちの笑顔や笑い声が終始会場にあふれ、子どもたちの夏の思い出のひとつとなったことをとても嬉しく思います。

最後になりましたが、悪天候の中、わざわざ足を運んでくださった皆さま、模擬店やステージの準備の手伝いや、参加してくださった皆さま、本当にありがとうございました。

（大前 友里）

子どものつぶやき

☆「赤ちゃんって野菜から出来てくるん？」て、考え込むBちゃん。いいえ、お母さんのお腹の中で大きくなっていくんですよー。

（四歳・女）

☆ 粘土遊び中。「お姉ちゃん見て！アップル」と振り向いてみると〝ワップル〟のことでした。

（二歳・女）

☆ 窓の外からコンコンと音が聞こえ、Kくんが「つつきや！つつきが来た！」と喜んでいました。Kくんに「つつきって何？」と聞くと、「くちで木をつっついて巣をつくるやつ」だって。「それ、キツツキやん！」でも、ここでキツツキはみつからないよ。

（六歳・男）

☆ 一年生の学年通信「たからじま」を見て、「これ、お姉ちゃんの住んでるとこやん！」と。いやいや、それは「たからづか」ですよ。

（七歳・女）

☆ 小学校の給食のメニューを見て、「シュガーやって！パンに付けるやつや。」と。よく見てみると「しょうが」でした。おしい読み間違いですね。

（六歳・女）

☆ 広報誌を見ていて「どうやったら子どものつぶやきに載れるん？」と。「そうやね、面白いこと言うたら載れるかな？」と言うと、「載せてほしい！」と面白いことを探し始めました。

（十四歳・女）

バレーボール大会

八月三十日、毎年恒例の神戸市児童養護施設連盟主催によるバレーボール大会が行われました。

今年は、どの年よりも早い六月中旬に練習が始まりました。昨年は二位という結果を残す事が出来たので『今年こそは優勝するぞ！』という強い思いを感じていました。練習は中学生、高校生が中心となり、体育館で行っていました。練習をしていると男子フロアの子どもたちが一緒に参加してくれる事も多く、良い雰囲気の中で子どもたちも頑張っていました。今年はメンバー構成を考えるのにぎりぎりまで子ども達と悩みました。高校生二人、中学生四人、小学生一人、職員二人の計九人で臨むことに。

試合当日、天気も良くて中央体育館へ向かう足取りも軽く感じられました。他施設の子どもたちの気合と共に緊張も最大限に。何より、真生塾の体育館のコートの大きさが少し小さいので、あまりの広さに驚いてしまいました。

全員で円陣を組み、気合を入れていよいよ試合の開始。一試合目は緊張もあって少し焦りも見えましたが、コートの中ではお互いに声を掛け合い、見事勝利しました。その後の試合でも失敗しても大丈夫、次取ろうと声を掛け続けてくれ、コートの中の雰囲気を盛り上げてくれました。結果は三位。悔しさも残りましたが子ども達が一丸となり、『優勝』という目標に向けて頑張ってこれたことが、私は嬉しく思います。

どの試合でも、疲れきっている時、周りからの応援がとても心強く、頑張ろう！という気持ちにしてくれました。毎年、幼児フロアから男子フロアの子ども達や、職員の皆、退所した子ども達も応援に駆けつけくれて、本当に感謝しています。

また来年、みんなで力を合わせてバレーボール大会に参加したいと思います。ありがとうございました。

（黒田　祐加）

セカンド　ステップ

当児童養護施設では、昨年十月より現小学二年生を対象に『セカンドステップ』を始めました。

現在の社会では対人関係を上手に結べない青少年が増加しています。自分の感情を上手に表現することができずに、些細なことで突然『キレて』問題解決を図り、取り返しのつかない事件に発展させてしまう子どもも増えています。

これらの問題を未然に防止する目的で作られたプログラムが『セカンドステップ』です。一九七九年に米国ワシントン州にあるNPO法人によって開発されました。それを二〇〇一年、日本のNPO法人『日本こどものための委員会』が日本の青少年向けに翻訳し、日本の文化社会に適用させて作り直してその普及に取り組んでいます。

私を含め二名が昨年の八月に研修会に参加し、取り組み始めました。子ども達と月二回、又は一回行っています。

セカンドステップでは、子ども達から出た意見に対して否定せず共感的に聞く姿勢をとることが大切です。最初の方には、少し悪ふざけもみられることもありましたが、セカンドステップを楽しみにしてくれています。こちらの問いかけに対しても手を挙げ発言してくれています。

セカンドステップは、三つの章に分かれています。第一章の内容である『相互の理解』の気持ちを考えることについては、ほぼ理解出来ています。写真の子どもの表情を見て気持ちを考える。そして写真と保育士の説明からその人物の気持ちを考えて相手にどう伝えるのか、「うっかりしたのか、わざとしたのか違い」について話し合い学びました。

セカンドステップの時間の中でゆっくり考えると分り、他者を思いやる事も出来ている子どもも居ます。しかし日常に返るとそれを生かすところまでは行かず、子ども同士のトラブルが多いのが現状です。

今後は、第二章『問題の解決』に入り、困った事を解決する方法をみんなで考えていきます。日常生活に生かせるように工夫をして行かなければ、と話し合い試行錯誤しつつ進めています。

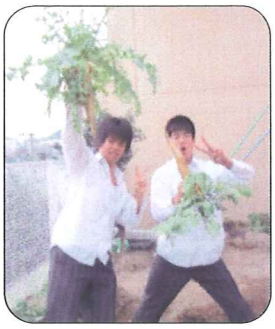
この八月にも二名が研修会に参加し、新たにメンバーを決めて始めていく予定です。学んだことを生かし、子ども達が「言葉で自分の思いを伝える・他者を思いやる・子ども同士で問題を解決できる」というように援助していきたいと思っています。

（沖野　世津子）

《児童養護施設 神戸真生塾》

野菜作りを通して

中村 純



南の児童棟東に面して、階段を下りると、約二五平方メートルほどの空き地がある。そこが、真生塾の野菜畑だ。

去年の六月中旬までは、雑草が生い茂り、誰も近づこうとはしなかった。蚊の発生を防ぐため、私はただ淡々と草を引いていた。額から落ちる汗を手ぬぐいで拭いながら一服した時、ひらめいたのだ。「ここは、キュウリかナスビあるいはダイコンが育つ場所になるのではないか」と。

中三のY君は、仲の良い先輩のH君が篠山で県立の農業高校に通っているということもあり、当時の成績では合格ラインに程遠いが、農業高校への進学を一応希望していた。そのY君と二十日大根の種を蒔いたのが、六月の末だった。発芽有効期限を五年も過ぎていたが、袋に残っていた種を実験的に使うことにした。雑草が周辺にまだ残る土を、二人で掘り起こしただけの粗末な畝に、三ヶ所それぞれに五粒ほど一緒に蒔いてみた。

十日ほどすると、芽が出てきたのだ。可愛い双葉が重なるように顔を見せていた。それも、種を蒔いた三ヶ所全部の箇所で、発芽していた。Y君と共に両手を合わせ、喜びを分かち合った。私が忘れても、Y君は朝夕の水やりを忘れていなかったのである。

日を増すごとに、本葉が伸びて大きくなり、十五日目ぐらいからその根も膨らみ始め、七月二十三日にY君と収穫した。私もY君も、自分たちで育てた最初の野菜の収穫であった。Y君は二十日大根をかじって呟いた、「ちょっと苦いけど食べれるな！」。そして、言いきった、「おれさ・・・進路、迷っていたけど、やっぱ、農業高校にするわ」と。

その頃より、中二のR君も手伝いだし、畝づくりに力を発揮していった。八月に入り北の壁に沿ってゴーヤの苗を植えた。チンゲン菜とキュウリは成長が止まってしまったが、ナスビやミニトマトそして特にゴーヤは順調に育っていった。

九月に入ると、Y君の親友であり、R君と同じ柔道部の先輩である中三のK君も、時々畑に来るようになった。三人による本格的な畝づくりが始まり、中央にしっかりとした畝が完成した。大根（YRくらま）を育てたいためであった。三人で蒔いた種は五日ほどで発芽、その後順調に育ち本葉がどんどん伸びていった。その間、三人は朝夕、畑に来るようになり、水やりを交替で自主的に行っていた。

八月頃より週に三度、午後五時から、Y君は彼の一番苦手な英語の学習を私と行っていたが、その学習に九月よりK君も参加するようになった。そして、K君も農業高校を目指すことに決めたとのこと。

十一月に入り、大根の白い根がますます太くなり、土から盛り上がってきた。十日頃収穫。中三の二人は興奮しながら大根を引き抜いた。大きいもので太さ八センチ、長さ三〇センチもあった。早速、厨房の栄養士さんや調理師さんに料理していただいた。あの時のサラダや豚汁、味噌汁での大根の美味しさは忘れられないと、今でも、彼らは言っている。

以後、私との学習もより熱心にやり出し、特にK君は、五時近くになると私を呼びに来るほどになった。YとKはお互い良きライバルとして受験勉強に取り組んで行った。それぞれ志望校は違うが、中学校からの推薦も許可され、小論文（作文）を書く勉強に集中。私のヒントも取り入れ、二人は切磋琢磨しながら文章作法を学んで行った。

二月中旬、播磨農業高校と篠山東雲高校の推薦入試に二人とも見事合格。現在、K君は高校の寮より、Y君は先輩のH君と共に十月に転居した学校の近くの民家より通学、それぞれに楽しく意義ある高校生活を過ごしている。

彼らが、自己を実現する一歩へと進むことができたのは、何よりも担当職員の支援と施設長をはじめ関係スタッフの協力があったからこそであり、中学校の先生方のバックアップも忘れてはならない。そして、彼らが私と一緒に行った野菜作りも、少しは役立ったと自負している。HとYの両君には、当施設のスタッフの泊まり込みによる食事の世話等が、まだまだ必要だけれど。

今年九月、長さ約三〇センチ、太さ一五センチほどもあるゴーヤができた。去年Y君やK君と共に、野菜を育てた中三のR君による世話の賜物である。ちょうど一年前に採種した種を、今年の五月下旬に、彼と植えたゴーヤが発芽し、成長してこの大きな実となった。施設長の知人である農家の方の誘いで初夏の頃より、彼は週末のほとんど、そのI氏の畑に行き、喜んで手伝っている。このゴーヤは、堆肥や石灰を土に混ぜる方法等、I氏より学んだことを真生畑で黙々と実行した彼の成果である。

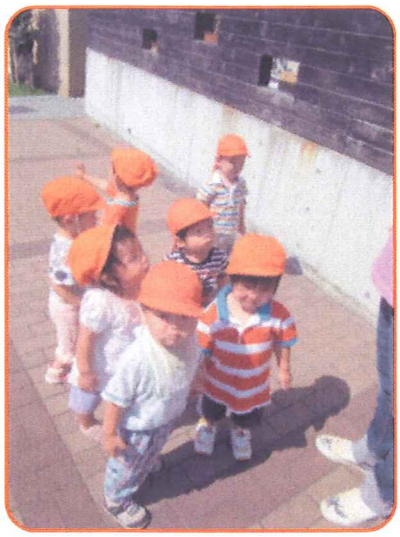
今年もYRくらまの大根が成長し太くなってきた。R君も農業家を目指し、より成長していくことだろう。きっと。

《保育所 真生きらきら保育園》

園だよりより

今年の保育園の年主題は『信じる～見えないものに目を注ぐ～』です。そして、年主題聖句は『わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。』（コリントの信徒への手紙Ⅱ四章一八節）としています。子どもたちの育ちの中には目に見えるものが多いですが見えない成長もあります。特に心の成長はなかなか見えにくいですが、一、二歳児のクラスの中でも徐々に周りのお友だちのことを気遣う場面を見ることができます。泣いている子の側に行き玩具をそっと手渡したり、やさしく「大丈夫？」と声をかけてみたり、いつのまにか保育士の真似をしている子もいます。この行為は目に見えるものですが、心の中で〝ぽっと〟灯ったお友だちにやさしくする気持ちは目に見えません。困っている子にさりげなく声を掛けてくれる姿をみるといつのまにか子どもたちの心の中も成長していることに気づきます。我々は日々の保育園生活の中で子どもたちのその様な心の中の灯に気づき、その育ちを見守り育っていくことを応援して行きたいと思います。

（園長：上杉 徹）



先日、園外へ散歩に出かけました。お友だちと手をつなぎ、保育園の近くをゆっくりと歩いて回りました。「手をつないで歩く」というのは子どもたちにとって楽しい事でもあり、自分の思うように歩けなくなるという経験をすることの一つとなったようです。「おてて、ぎゅー」と言って手をつなぐと顔を見合わせて笑顔を見せている子どももいました。はじめはゆっくりゆっくり歩いていたのですが、下り坂道になると体が自然に早く動いてしまう子どももいれば、逆に歩きにくくなり、ゆっくりというよりも一歩いっぽを丁寧に歩く子どもまで様々でした。そうなってしまうので、自然と手が離れてしまったり、思うように行かず泣いてしまったりと色々なハプニングもありました。でも、子どもたちは大きな車やバイクを見て大喜びしたり、歌をうたいながら歩き、園に戻ってくることができました。

これからも、少しずつ「手をつなぐ」や「一緒に歩く」という経験を取り入れ、お友だちとの関わりに興味を持っていけたらと思っています。

（一歳児クラス担任：藤原美智子）

九月にはぶどう狩りに行きました。ぶどう狩りでは指先や口の周りをぶどうの汁だらけにして食べていました。ザルの中にぶどうが入っていて、グループのみんなで分け合って食べたのですが、ぶどうがだんだん少なくなると自然とザルの中に手をのばすペースが速まり、目をキラッと光らせていた姿が印象的でした。最近、お友だちのちょっとした言葉が気になることがあって、そのことにより様々なことが起こるのです。話をしっかり聞いていなかったことにより、みんなと全く違うことをしてしまいます。そんな時、「違うで～」と教えてくれるお友だちがいます。間違えたことに対する恥ずかしさからか「先生、○○ちゃんが偉そうに言ってくる～」と訴えてくるのですが・・・。全ての様子を見ていたので、「偉そうに言ったんじゃなくて、教えてくれたんやで」と言うと苦笑いを浮かべてみんなのもとへと戻っていくのでした。

このようなことだけではなく、友だち同士のちょっとした一言でパワーアップすることもあります。先日、フラフープで陣取りをした際に最後まで残った子に対してどのような言葉を言うかなあと見ていました。「自分も残りたかった」とか「悔しい」など色々な気持ちを持っているんだろうなぁ・・・と思っていたのですが、「○○ちゃんすごい！！」と一人が言うと自然に拍手が起こりました。ちょと驚きましたが、こんな風にお互いを認め合うことができるようになってきたことが嬉しかったです。今後もこのような関わりを大切にしたいです。

（三歳児クラス担任：山口郁恵）

皆様のご意見、ご要望をお聴きしています。

神戸真生塾苦情処理委員会

苦情受付担当者　難波美智子（子ども家庭支援センター ロータリー子どもの家 センター長）
森　みずき（真正きらきら保育園 主任保育士）

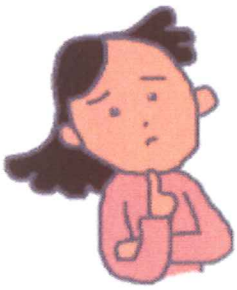
苦情解決責任者　富川　和彦（児童養護施設 施設長）
綿谷　榮子（乳児院 施設長）
上杉　　徹（保育園 園長）

第三者委員　森光　規之（当法人 監事）
中村　悦子（主任児童委員 中央区山手地区民生委員児童委員）

苦情受付件数　平成23年度　7月より10月末まで　0件

子育てに困った時は先ず電話！

毎日、午前9時～午後6時、緊急のご相談は夜間もOKです。



ロータリー子どもの家は、児童福祉法に基づく児童家庭支援センターとして、神戸市から認可を受けています。

二〇〇五年度の四月より、従来の活動とともに、子どもと家庭についての専門相談機関として、働いています。

子育てホッとライン（相談専用）

TEL.078-341-649

神戸真生塾子ども家庭支援センター
（ロータリー子どもの家）

Homepage　http://www.rotary-kodomonoie.org/

《編集後記》

秋も深まり、子どもたちは様々な経験を通し成長しています。これからも楽しく子どもたちの成長する姿を伝えていければと思います。（山本）

今回もみなさんに子どもたちの生活の様子をお届けできることを嬉しく思います。この広報誌を読んで子どもたちに想いを馳せていただければ幸いです。（金岡）

夏には沢山の行事もあり、子どもたちの楽しい思い出を皆さんにお伝えできたかと思います。今回は新しい記事に「セカンドステップ」も入れてみました。（増本）

季節もかわり、広報誌も後記となりました。子どもたちの日々成長するする姿を季節とともに感じながら、その成長の様子を楽しみ、見ていただけるよう頑張りたいと思います。（伊田）

暑かった夏が過ぎ、皆、長袖姿になって来ました。子どもたちの日々の様子を誌面から感じ取って頂けたら、と思います。記事にご協力頂いた皆様ありがとうございます。（有吉）

今年度も早いもので半年が経ちました。あと半年、たくさんの行事が控えているので、子どもたちの成長をお届していきたいと思います。（中山）